

大岡 信著

新 折々のうた 6



岩波新書

760



大岡 信著

新折々のうた 6

岩波新書

760

大岡 信

1931年静岡県三島市に生まれる

1953年東京大学文学部卒業

詩人

詩集—『記憶と現在』『悲歌と祝禱』『春 少女に』『水府』『詩とはなにか』『ぬばたまの夜、天の掃除器せまってくる』『故郷の水へのメッセージ』『地上楽園の午後』『火の遺言』『捧げるうた50篇』『世紀の変り目にしやがみこんで』など
著書—『折々のうた』(正・続・第三～第十・総索引・新1～新5)『詩への架橋』『抽象絵画への招待』『連詩の愉しみ』(以上、岩波新書)
『現代詩試論』『紀貫之』『彩耳記』『岡倉天心』『うたげと孤心』『表現における近代』『万葉集』『ヨーロッパで連詩を巻く』『窪田空穂論』『詩人・菅原道真』『詩をよむ鍵』『一九〇〇年前夜後朝譚』『正岡子規—五つの入口』『日本の詩歌 その骨組みと素肌』『ことのは草』『ことばが映す人生』『私の万葉集』(全5冊)『ヴァンゼー連詩』(共著)『ファザーネン通りの縄ばしご』(共著)『大岡信著作集』(全15巻)『日本の古典詩歌』(全6巻)など

新 折々のうた 6

岩波新書(新赤版)760

2001年11月20日 第1刷発行

著 者 おお おか まこと
大岡 信

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© Makoto Ōoka 2001

ISBN4-00-430760-0

Printed in Japan

目次

春のうた 1

夏のうた 47

秋のうた 91

冬のうた 139

あとがき 185

作者略歴(兼索引)

春
の
う
た

春雨や人住みて煙壁を洩る^も

与^よ謝^さ蕪^わ村^{そん}

『蕪村句集』所収。蕪村には春雨の句が多いし、すくれてもいる。春雨の情緒が彼の句にしっくり合っていた。右の句、読むたけても佳^よい句と感しられるか、前書きかまたいい。「西の京にはけもの栖^すみて久しく荒れ果てたる家ありけり今は其^{その}さた（お化けの話）なくて」というのた。昔の話はともあれ、今は人も住みついて、壁のすきまからは煙か洩れてくるのである。蕪村の一句は優に短編小説に匹敵する。

おもむろに母の死顔^{しにかほ}変りゆきもつともかはゆくなりて定まる

高^{たか}金^{かね}啓^{せい}子^こ

『麦の穂』（平一二）所収。昭和二年岩手県生まれ。師範学校を出て県内各地で教職についた後退職した。昭和五十五年から「コスモス岩手」で短歌を作り、上記か第一歌集。「聴診器はつしてふかく礼をする祖母の末期を看とりしわが子」に続き右の歌がある。祖母・母（作者）・子の三世代が鮮やかに歌われる。「姑^{しゅつとめ}も実母も母と書けばいいと男らは言ふ歌会の席に」。なけやりな男ら、硬骨の女。

存分に老人の顔になつたたと語りかけたき鏡中のひと

清水房雄

『老耄章句』(平一二)所収。大正四年千葉県野田の生まれて、現在八十代後半。右の歌は鏡中の自分を見ての感慨である。黄金時代の「アララキ」で土屋文明選を受け、のち編集委員をも務めたアララキ派歌人の長老で、日常生活の断片をとらえて物事の深みを突く手腕の冴えて定評があった。漢文字を専攻し、長く教壇に立った。「これだけの事だつたのか何もかも顧み顧みるよはひ到るなり」

恋をしてするりと皮を剥くやうにちがふ顔していつちまつた吾子よ

青木智子

『のんのんずい』(平一二)所収。表題は「をさな児はのんのんずいと攻めよせてわか半日はあへなくそ散る」などの歌によっているのたろうか、不敏にして初耳だった。講談なとて軍勢が押し寄せるさまなどを言った言葉から来ているものか。たぶん幼児語に類するこの種の語彙まで、歌集の題に用いられる世となった。母としての自分、娘たち、また幼い孫が形つくる濃密な家族の精神圏が随所に現れ、歌集の核をなす。右の歌も、背後に小さな心理劇が見え隠れして。

紅梅や謡うたひの中の死者のこゑ

宇佐美魚目うさみぎよもく

『草心』(平元)所収。能の謡の中て声を発しているのは、とうの昔にこの世を去った死者。現世の僧の前に姿を現し、在りし日の秘められた物語を演しするというのが、多くの能の骨格をなしている。右の句で「謡の中の死者のこゑ」とあるのはそれを指しているのたろう。この声が、句にあるように、折しも紅梅の季節に響いてくるなら、それを発している靈魂も、和泉式部のような妖艶な女性なのかもしれぬ。

男とは老いておとなし梅を仰ぐ

本井 英もと い えい

『夏潮』(平一二)所収。昭和二十年生まれ、慶大の大学院で国文学を専攻。清崎敏郎が俳句の師で、虚子の花鳥かちよつふつえい諷詠を信奉する。「宇宙を司つかさどる唯一絶対の力の運行に身を委ゆだねねて、同じように旅をしている森羅万象を讃さんび美し」て生きたいとあとかきにいう。この年齢でいさきよい覚悟。篤実な虚子研究家として業績がある。右の句など別の「仰ぐ」姿勢もありそうなものだが、今の男のこれが実態たろうか。

梅さくや馬の糞道江の南くそみちこうなん

上田秋成つえだあきなり

『無腸句集』所収。無腸とは秋成の俳号。へそまがり进行自認していた作家らしい型破りな句だ。「江」はこの作家の活動していた地域からいっても淀川だろう。わざわざ漢詩風に氣とってみせたのだが、その「江の南」が馬糞ごろごろの道で、しかも香氣を愛でられるものの筆頭と云うていい「梅」か今を盛りと咲き誇る。この取り合わせはいかにものとかな早春の淀川へり、そしていかにも偏屈作者風。

畦焼あぜきしあと地卵ちたまごを売りにゆく

細見綾子ほそみあやこ

『存問』そんもん(昭六二)所収。ゆったりした季節の流れの中で、てきぱきと順序よく営まれている農家の生活。ちょっと離れて見れば、まるで古い時代の中国あたりの悠然たる農民の暮らしふりを詠んだ句のようにも思われてくる。俳句というものが簡潔な言葉で成り立っているということは、結果として、たとえば右の句の主語の省略にも関係しているわけだが、そのため時代を超えた感じをも生みだせるのである。

予防法廃止にて島を知りたるか飼犬かひいぬを捨てにくる人がゐる

鏡かがみ
巧たくみ

『不作為犯』(平一〇)所収。「らい予防法」は平成八年三月廃止された。「今にして思へはらいは入園後三年はかりて佇りてゐたり」。「らい予防法」のために五十年間縛られてきた著者は、現在七十歳を過ぎ、予防法違憲訴訟に奮闘中。「予防法違憲の提訴できる身をしあはせとせむ生きのびて来て」。たか周辺の市民はとうかといえは、右の歌のような小ずるく狡猾な「一般市民」は、とこにてもいる。

にんげんに出来ぬことなり野良猫はいつかどこかて人知れず死ぬ

野の村むら
清きよし

『しゃっぽ』(平一〇)所収。明治四十年静岡県に生まれ、平成九年に没した歌誌「コスモス」の長老歌人。元来北原白秋に師事し「多磨」同人だったので、温雅な作風だったが、高齢になるにつれ、洒脱飄逸しゃつひひょういつな作風を特徴とするようになり、諧謔味かいぎやくを漂わすようになった。右は遺歌集中「野良猫讃歌」の一首。「多産なる野良猫にも自然淘汰ありや街にあふれるほとには殖えず」。確かに猫の不思議である。猫たけてはない、小動物も鳥類も。鳥などは例外のようたか。

春小袖生きてゐる間の紐の数

中村苑子

『花隠れ』(平八)所収。「黄泉に来てまだ髪梳くは寂しけれ」など俳句には珍しい幻想世界を詠んで第一人者と言ってよかった作者。平成十三年一月、八十七歳で逝去した。孤高の俳人三橋鷹女のほとんど唯一の弟子たか、愛読者は今後ふえるだろう。右は生前これか最後といつて出した句集より。杉田久女の有名な「花衣ぬぐやまつはる紐いろく」を意識した句か。中七にはとんな感慨かこもっているのたろう。

光堂より一筋の雪解水

有馬朗人

『天為』(昭六二)所収。岩手県平泉の中尊寺は十二世紀初めの創建。金色堂(光堂)と経蔵が今に残る。光堂は黒漆に金箔を張り、柱梁には螺鈿を埋め尽くした荘厳なお堂だが、俳人にとつては何といつても芭蕉か、『おくの細道』の旅で有名な句を作っているという縁がある。右の句もそれを自覚している。雪解け水が一筋光堂を流れ出る光景だけを詠んで、ほかのすべてを捨てた。省略による拡大の技法と言ってよかろう。

のしかかり波が波追ふ雪解川ゆきげがは

岡田日郎あかだいちろう

『山景』(平二)所収。山岳俳句の作者として有名で、各地の山に登攀し、臨場感に溢れる俳句を作り続けてきた「徹底写生」の信奉者。右は群馬県北部、谷川岳と一ノ倉岳の東斜面の谷、一ノ倉沢での作。八百メートルの峻険を背負う谷の、雪解けの時期の激流。「のしかかり波が波追ふ」に壮絶な迫力がある。昭和七年東京生まれ。戦中長野に疎開して、信州の山岳に魅了されたのが俳句作りの原点のようだ。

はるかぜにおさるゝ美女のいかり哉かな

加藤暁台かとうきょうだい

『暁台句集』所収。春風は温和なたけではない。疾風も吹くし、立春後間もなく春一番、二番と荒れて吹く。天明俳壇で蕪村をもしのぐほと名声高かった暁台の句。題材はさすがに、たとえば尊敬した芭蕉などが詠まなかった、いわば浮世絵風な「美女」をとらえる。同時代の三宅嘯山にも「抱下ろす君が軽みや月見船」があるが、女性の軽やかさを美人の一条件としたのは、江戸時代の新風俗だったのか。

山肌に付き合ひほどの雪残す

あめ みや ほう せい
雨宮抱星

『妙義春秋』(平一二)所収。昭和三年群馬県妙義町に生まれ、ずっと住んてきたらしい。既刊五冊の句集もすべて妙義の名を題に入れていて、執念のようにふるさと妙義に挑んでいるが、とらわれてしまうと名山の方でも窮屈に思うかも知れない。右は山の残雪もしたいに消えてゆくころの寸描だが、「付き合ひほどの」という中七に、思いついた言葉がうまく生かされている気配があつてよい。

これのみはおほしたて得つほかの花はただ苗のみを植ゑすてしわれ

つほ ちし しょう しょう
坪内逍遙

『歌・俳集』(昭三〇)所収。昭和十年元旦に「さ おつ少翁訳集の修訂刊行を了おわつて」と詞書して作つた自祝の歌。この年二月二十八日逝去。『新修ノエクスピア全集』四十巻は昭和八年から加筆修訂を進めてきたもので、死の直前にそれが完了したのだ。「おほしたて得つ」は養い育てることがてきたの意で、他にも逍遙の偉大な文業は山脈をなしていたのに、かれ自身はこの少翁訳をとりわけ誇りとしたわけだ。

卒業す大器晩成ちふ息子

石井みや

『蔵の中』(平一二)所収。「ちふ」は「といふ」を約したもので、「てふ」「とふ」などとも同じ。平安時代にさかのほる言い方で、現代詩歌には珍しい。右に掲げた句についていえば、息子へのいとおしさと、ちょっとしたおとけた伶やかし気分もましってこんな言い回しになったものかとも思うか、作者はなぜかこういう古風な言い回しか好きらしく「清音きよねてふ駅過きてよ
り春の土手」もある。

炊いてこそ米のかがやき露ふきの臺たつ

進藤一考しんどういつこう

『真紅の椅子いす』(平一二)所収。パンにはパンの、麵には麵の、てきた瞬間の香りや艶つやがあり、それそれかすばらしい賜物たまものとして食欲を有する人間に与えられる。しかし右の句のいう「かがやき」かまさにびったりくるのは「米」てはなかるうか。そう思うのは日本人たからたろうか。この句はそのかかやきと「炊いてこそ」の結ひつきかい。そこへ、「お待ちかね」と雪解けの土から芽吹いて現れる露の臺。

笑ふかに泣くかに雛ひなの美しく

上野うえの 泰やすし

『佐介』(昭二五)所収。桃の節句の雛の顔は、細く切れ込んだ眼の表情に人形造りの精魂こめた腕の見せところもある。この表情の魅力は、能面のいわゆる中間表情とも共通のものかあるだろうか、右の句はそれをむしろ率直に「笑ふかに泣くかに」と絵解きし、逆に雛の美しさをそっと囲っている。虚子の六女章子と結婚して俳句の道に入り、虚子門の俊英に育ったが、五十四歳で惜しくも病死し、「ホトトキス」一門にとっての損失も大きかった。

千里より一里が遠き春の闇やみ

飯田い龍太りゆうた

『遅速』(平三)所収。恋しい人の元へ急く気持ちをいうのに「千里の道をも遠しとせず」などという。「千里」は遠さの代名詞だが、右の句はこの比喻を逆手にとり、「春の闇」の色濃さをあさやかに言いとめた。作者は人が何となく感じていることを的確な言葉で表現する名手である。上記句集ていえは、「鶏鳴に露のあつまる虚空かな」など、感覚の触角を実に鋭敏に働かせた句たといえる。

とかけ
蜥蜴以下啓蟄の虫くさくさなり

ナカ
高 兵 虚 子

『五百句』(昭一二)所収。「啓蟄」は暦でおよそ三月五日ごろ。冬眠した蜥蜴・蟻・地虫・蛇・蛙などが、春暖の候、土中から現れ出ることをいう。虚子はこれを昭和六年三月十三日東大俳句会で作った。学生俳人たちにこの季語を説明する代わりに、実作ですはりと語ったわけである。歳時記流の知識を並べるより実作が肝心だよ、といういわば開き直りである。虚子の自信と機転が感じられる。「くさくさ」は種々。

もりかげのふぢのふるねにゆるしかのねむりしづけき
はるのゆきかな

あいづや
会 津 八 一

『鹿鳴集』(昭一五)所収。作者第一歌集『南京新唱』(大二三)の冒頭「春日野」の章にすでにあった歌。当時は『鹿鳴集』式平かな・分かち書きの形ではなかった。八一は明治末年から奈良の風光と美術にとりつかれ、しばしば古都に通い、たれの流儀にも従わない短歌を作っていた。「春日山のほとりには、杉の古木多く、それに纏へる藤にも老木多し」と後年自註している。「よる」は寄りかかる。

借りものの言葉で詠へぬ齡としとなりいよいよ平明な言葉を選ぶ

河野裕子かわの ゆうこ

『家』(平一二)所収。現在の短歌界で、無理や背伸びをせず、欲するままに歌を作っている感しを与える女性歌人の筆頭はこの人たろう。自然児の感受性を保ちなから成熟してきた人の感じがする。それだけに右の歌は印象的だ。今までたって「借りものの言葉」ではなかったろう。それだけに、「いよいよ平明な言葉を」の願いは意味深い。「お守りとする一冊の歌集欲しあと三十年歌人であるために」とも詠んでいる。

定年後二十年経し記者にしてタノプダンスを教へるゝとぞ

島田修二しまが しゅうじ

『行路』(平一二)所収。定年の後二十年という、たぶんこの作者と同年輩の元新聞記者だろう。作者自身かつては記者だった。長寿時代になると、サラリーマンの定年後は、半世紀も前なら想像もてきなかったような「行路」をたことになる人も激増する。この歌の元新聞記者は、かつて遊び覚えたタノプダンスに身を助けられて、元気に過こしているわけだ。あるいは作者の昔の同僚だろうか。